

偶然Yさんに出会って

先日、偶然Yさんにお会いした。挨拶されたが誰だか分からない。「すまんけど、マスク除けてくれるか」とお願いして顔を覗き込んだら、若い時の面影を思い出した。平成八（一九九六）年四月、私は農業経営高校へ新校長として着任したが、彼も農業科の新採用教師として赴任して、果樹担当として三年間在籍したYさんだった。それ以来三十年近くお会いした記憶がない。

「Yさんか。農業経営高校へ新採やったのう」

「はい、Yです。職員会議で校長訓告だったA君を、申し渡しの時、校長先生が無期停学にしたのを、今も時々思い出します」

と、いきなり告げられた。これには、正直びっくりした。実はその数日前に、私は件の「無期停学」を申し渡した夢を見てうなされていたのだ。夢の中でYさんの相棒（農業実習では教師二人がペアを組んで担当する）の顔は出て来たが、夢から覚めても名前が出て来なかった。

「そうか。あの無期停学を覚えとるんか。ところで、あの時の相棒は誰やったんかいのう」

「はい、O先生です」

「ワシは、ついこの間その夢を見たんじゃよ」

三十年近く前のその無期停学のいきさつが、昨日のことにようにその時、脳裏に浮かんで来ていた。

みかん収穫実習初日の朝、果樹担当のO先生に元気がない。私は

「何かあったんか。元気がないやないか。腹が痛いなら正露丸を飲んで元気出せや」

と、冗談交じりに訊いた。

「収穫したみかんを遠くへ放り投げる生徒が居るんです。注意しても聞かんです。憂鬱になります」

「そんなことで憂鬱になってどうすらいや。生徒指導主事に相談せんかい」

「相談しても同じです。毎年のことですから」

諦め顔である。直ぐに私は生徒指導主事に相談に乗って上げるように指示した。

やはりA君が放り投げたらしい。生徒指導委員会、続いて職員会議が開かれた。今まで懲戒処分の前例がないが、今回は校長訓告処分とすることで先生方の意見がまとまった。最後に私は悩みつつ意を決して立ち上がって、

「この件に関しては懲戒の前例がないということで、苦慮された皆さんの意見を尊重したいのは山々ですが、校長訓告は止めて、停学三日にします」

と決済した。

翌日八時前に出勤すると、応接室から怒鳴り声が校長室へ聞こえて来る。一向に止まないのです事務長に、

「ちよつと様子を見て来て下さい」

とお願ひした。事務長が生徒の保護者のようです、と報告に来たので、

「校長が聞くからと言って連れて来て下さい」

と再度事務長にお願ひした。校長室へ入って来たのは、みかんを放り投げたA君の両親だった。父親は入って来るなり私に向かって怒鳴って来る。

「みかんの一つや二つ放り投げたぐらいで、どうして停学なんや。納得出来ん」

母親は黙ったまま俯いている。私は徐に着席を促した。向かい合つて座つて、

「私は今年四月に校長として着任した小野です。お父さんのお話をお聞きしましょう。

さあ、どうぞ何なりと申し述べて下さい」

と、やんわりと促した。最初は怒鳴っていたが、次第に声は小さくなった。私は一言も口をはさまず相槌を打ちながら、『この父親にしてこの子あり』かと思いつつ、今から自分が実行しようとしていることは『大義名分が立つか』と自分の心に問い続けた。三十分は過ぎただろうか。

「お父さんのお考えはよく分かりました。私はお父さんのお考えには、校長として納得出来ませんね」

とだけ言つて、事務長に、応接室のA君と生徒指導主事、学級担任を連れて来るように指示した。三人が入つて来たところで私は、A君は両親の横、生徒指導主事と学級担任は私の横へ座るよう指示した。三人対三人、向かい合つて座つたところで私は宣言した。

「本来ならここで全員起立して整列し、威儀を正して懲戒処分申し渡しをするところですが、今日はそのように進めることが出来なくなりました。お話を伺っていると、お父さんはみかんの一つや二つ放り投げたぐらいで停学処分は納得出来ないと言われるのですから、停学の申し渡しは止めましょう」

これだけ言つて私は生徒指導主事に「退学願ひ」の用紙を持つてくるように指示した。

私はその用紙を父親の前に置き、

「これを書いて、息子さんを連れて帰つて下さい」

と言ひ渡した。A君と両親の反応を見た。父親は書こうとしない。私の予期した通りである。重苦しい沈黙が続いた。漸くしてA君が口を開いた。

「僕は学校を辞めたくない。したらいかんことをしたんやから停学を受けます。校長先生、停学をお願いします。お父さんは間違つている。僕は初めから停学を受けると言つ

ているのに、……」

今にも泣き出しそうな顔をしている。父親は何も言わない。暫く待ったが、やはり何も言わない。怒鳴り散らした手前、言えなかったのだろう。ここら辺が潮時と見て私は、

「お父さん、退学願いを書きますか。それとも停学処分を受けますか。お父さんが此の期に及んで停学処分を受けると言われるなら、A君に免じてしない訳でもありませんが……」

結局、無期停学を申し渡した。それから数時間、今度は両親が、私の話を聞く番である。勿論A君も一緒に。生徒指導主事と学級担任も同席してもらって話を続けた。

「責めるべきはみかんを放るという行為。これはしてはいけないこと。小さな間違いをしつかりと反省させることが大事なんです。それが親の務めです。お父さん、いいですか。そして教師の務めです。回りの大人の務めです。これくらいと見逃していると、やがて大きな間違いを起こしてしまいます。その時にはもう手遅れです。取り返しが付きません。

懲戒処分とは、端的に言えば、生徒が問題を起こした時、校長が親を呼んで生徒と一緒に叱ることです。その叱り方について、私が心して注意している原則があります。部分否定でなければなりません。責めるべきは、みかんを放り投げた行為、嘘をついたと

いう行為、タバコを吸ったという行為です。「お前はダメだ」は禁句です。言われた本人は自分を否定されたと受け取り、以後聞く耳を持たなくなります。言った側は、相手の人格を否定した瞬間に叱る資格が無くなります。これでは、懲戒処分は形式だけの中身のない、効果の全くない代物になってしまいます。

お父さん、お母さん、もう少し時間を下さい。私の思いを聞いて下さい。

私はこの四月に校長として着任しました。残念ながら学校は未だ荒れています。私は、正常な普通の学校として、農業教育に一路邁進出来るように立て直す責務があります。先生方と協力して真剣に取り組んでいます。本校は農業高校です。作物や家畜は本校の最も大切なものです。鞍掛山のみかん園は、先輩達が山を開墾して苗木を植え、精根込めて育成してきた本校の宝物です。そこで収穫するみかんは、投げるものではありません。皆さんに喜んで食べて頂くものなんです。

人間は、常に反省しないといけないのです。常に反省することによって徳が身につけていきます。私は大学卒業式の日に研究室の西川五郎教授から「吾日三省」の色紙を頂きました。「われ、日に、三たび省みる」です。「小野君は思い付いたら即実行する。危なくなくていけない。朝、昼、夜、一日三回反省しなさい。朝起きたら、昨日はどうであったかと先ずは反省しなさい。反省を重ねることによって徳が自然と身に付いて来ま

す」と教えられました。

「徳」とは、（心がきれいで）努力しないでも、すべての行いが人の模範とするに足ることです。中国から日本へ伝わった教えの一つです。古来、中国では「仁」「義」「礼」という三つの言葉で言い表されていました。「仁」とは他を慈しむこと。「義」とは道理に適うこと。「礼」とは礼節を弁えること。この「仁」「義」「礼」の三つを備えることで、初めてその人を「徳」のある人と呼ぶのです。この徳はさかのぼると、中国の春秋時代に行きつきます。日本でもよく知られている孔子（紀元前五五一年誕生？）をはじめとする聖人、賢人たちが「人の道」を説いたのです。「徳」とは、利己（自分だけの利益をはかること）だけを追い求める人々を戒めるために生まれた教えなのです。

無期停学と言っても、毎日登校させて下さい。正規の授業は受けられませんが、一時間目から放課後も一時間、時間割を組んで、先生方に指導してもらいます。今日だけは、家庭でしっかりと反省させて下さい。明日からは普段と変わらないように登校させて下さい」

でい」

（令和七年四月一日）